

仮面ライダーオーズ、
え？原作800年前？

刀花子爵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間にか異世界に転生！

へー、でいつの時代？

800年前?!うそだ?!

目次

神様転生ってなんだっけ? | 1

やはり時代は現代：現代が最高なんだ!

5

神様転生ってなんだっけ？

「Happy Birthday!!!」

意識が上がると同時にとんでもない音量で誕生を祝われた。

てかどこだココ？

「おめでとう！新たな王族の誕生だ!!!」

てかこのテンション高い人誰？さっきから声でかいんだけど、てか、え？

なんの？おれ、赤ん坊になってんじやん?! え？

手ちっちゃ！足短かつ?!

最近はやりの神様転生ってやつ？

うわー、ないわー、マジでないわー。

体が赤ん坊のせいか、おぎやあと泣いてるマイボデイ。

それを見て笑ってるどこか癖のありそうな人。

てかさっきのセリフどこかで聞いたことあるんですけども。

まあ今はそんなことよりも。

「ははは！泣き疲れたようだね！」

(☒ ☒) スヤア…

赤ん坊の体力には勝てなかつたよ。



俺がこの世界に転生？してから早5年。

あ？赤ん坊ライフ？知つても意味ねえよ。

地獄ではあつたけど。

とりあえず現代ではないことがわかつた。

電気もねえ、テレビもねえ、車すらねえ。

アニメもゲームもソシヤゲもねえオラこんな時代嫌だ。

夜になると太陽の変わりはガツツリ松明だもん。

ご飯は王子のせいかわなるものは来てない。

でも、いつの時代だよと思つた。

てか、最近になって自分が王子ということがわかつた。

どうやらうちのpapanは王様らしくいつも欲望とか、誕生とか言つてる正直それよりも領地や政治をきちんとして欲しい。

後うっさい。

しかも王の鎧とか、錬金術師とか言つてる。

「ところでフレイよ」

あ、因みに自分フレイって名前です。

でなんだよ。パパン？

「お前はまた、書物を漁ってるのか？」

アニメも、ゲームも音楽すらないこの時代って体鍛えるか本読むことぐらいしか楽しみないんだよね。

もちろんインドア派の俺は後者に没頭

おかげでこの時代にしかない知識が頭の中でフイーバーである。

是非もないよネ！

「はあ」

どうした。パパン？ため息か？幸せ逃げるぞもしくは禿げるぞ。

「そんなことはどうでもいい!!」

いや良くねえだろ。

ハゲの王様とか実際どうよ？

王冠が光るのは禿げた頭の光が反射して王冠光らせてんの？

また、ため息をつくパパン。

やれやれ、全く。

「全く、息子の前で情けない姿を見せるのは辞めたらどうだオーズ」

そう言って俺を膝の上に乗せている怪人体のアंक。

「悩みの種は君たちなんだがね」

はあとまたため息をつく。パパン。

フレイ、王子、趣味、錬金術。

とある5人の錬金術師たちの真似をしてちよつとやらかしたことのあるただの5歳児である。

……………転生して異世界と思ったら仮面ライダーオーズの世界
だったでござる。

あ、後頭部に当たるアंकの女性の象徴がふかふかして気持ちいい。

やはり時代は現代：現代が最高なんだ！

薄暗い部屋の中、耳に入る電子音とは別の音が部屋に響いた。

「始まってしまったか」

モニターにはゲームクリアの文字が映し出されていた。

「どうするんだフレイ」

「いや、まあ、ほら、あの子達の封印が解かれてもさ、色々あの子たちの中で積もる話もあるじゃん？そこに俺が居ても何もならないと思うし今時あんな大きな会社の会長だっけ？なってる弟の子孫に叔父さんですよーっていうのもなあーって俺はおも、ちよあんどくさん！首！首持たないで！わかった！わかりました行きます！行くから！」

モニターと向き合っていた幼い少年フレイは赤と金の混じった髪の毛の女性あんどくは首をつかまれほぼ強制的にどこかへと向かうようだ。部屋着であろうジャージを脱ぐと一人の女性から服を渡される。

「あれ、みんなで行くのかい？」

「いんや、今回はやつても顔合わせだし俺とあんくでいいよ」

「そう、ならボクたちはいいい子で留守番してるよ」

「かざりは相変わらずかわいいねえー」

フレイは幼さが残る金髪の少女かざりの頭をなでながらどどん着替えていく。

「んじゃ、行こうかあんく」

完全に着替え終わった自身の右手をあんくへと伸ばす。

「ああ、我が主よ」

あんくが大きな赤い羽根を広げ自身とフレイを包むと二人の姿は消えた。

瞬間移動で今代のオーズの所へジャンプである。

「ウヴァのヤミーだな」

「いやまあ、見た目カマキリだからね。うん昆虫系ヤミーだからウヴァだね。それにしても……男かあ残念だ」

「……お前は、女の怪人なら誰でもいいのか」

呆れたようにあんくが呟く。

失敬な、これでも自分の中でいくつかの基準があるんだぞ。

わかっていないなど、ため息をつけばジト目で見られる。

「それにしても、彼面白いね」

「今代のオーズか？」

「うん、俺達の血筋じゃない子がオーズになってる。それも全く混じってない子だね」

血筋じゃないけれど、面白い子だ。

「……」

見たことのある赤い右手が今代のオーズの周りを飛んでる。

正確に言うとな俺の近くにいるあんくにとても似ている右腕が。

「あれ、アングの右手じゃね？」

なんで右腕だけ？てかあいつ鳥なのに自切できるの？それどっちかというとなメズー

ル側の能力じゃない？

いや、ほんとになんで？

確かにあの子たちを生み出す過程で俺も少し関わったけど今までそんなことなかつ

たじゃん。

「……」

ほら、うちのあんくさんが絶句よ。

俺の前だとそれなりにお喋りな彼女が絶句よ。

まじでなにしてるのあいつ。

お、カマキリメダルだ。

へー、それ使う。

ほー、タトバを普通に使うんだ。

しかもトラをカマキリに変えても普通に使ってるね。

「何事もなく成っているな」

「だねえ。右腕だけのアंकに四種類とはいえメダルを使いこなしている今代のオーズ。いいね！」

面白くなってきた。

「あんく、俺達の子孫に会いに行こう」

何を考えているのか面白くなってきた。

「オーズはもういいのか？」

意外な顔をするあんく。

「いいよ。だってアंकがついてるんだし大丈夫でしょ」

「そうか」

なんで笑顔なんすかねあんくさん